

演劇部が朝日新聞で紹介されました！

届け！ 晴れ舞台 熱演を全国へ

次回選考は未定

全国高校総合文化祭演劇部門として毎年夏に開催される全国大会へ出場できるのは、8ブロック9地区を勝ち抜いた11校と開催都道府県枠の1校の12校。中部日本ブロックの場合、前年秋ごろまでに開催される地区大会、県大会を勝ち抜いた6県代表が集う冬のブロック大会上位の1校が出場できる。各ブロックへ順番に割り振られる出場枠があった2020年は津島北高校、愛知高校が出場を決めていた。両校を含む全国大会出場校の舞台は「WEB SOUBUN (ウェブそうぶん)」のホームページで随時公開される。

愛知県の場合、夏は来年の総文出場へ向け地区大会と県大会が開かれている時期。次回総文へ向けたい選考がどうなるかは未定だ。

素直に展開する落語の世界を表現するため、照明の切り替えで場面転換する。工夫を凝らした舞台はこの日も観客の笑いを誘った。カーテンコールでは、この日が最後となる3年生への花束贈呈もあった。演出担当の矢口ひなかさん(8年)は「いつもは(2年生が演じる)清兵衛が勢いをつけるのですが、(3年の)ト喜が安定していて支えている姿に感動した」という。部長で若侍役の伊藤駿吾さん(2年)は「高校生の前で演じるいつもと違い、大人が多くて緊張した。笑いが起きて安心しました」と話す。「色々な人に見てもらえるし、何回でも見返してもらえると」と、オンライン上演に期待する。(小原智恵)

総文・演劇部門 コロナでオンライン上演

新型コロナウイルスの感染拡大は部活動にも大きな影響を与えた。高校演劇では、愛知県立津島北高校(私立愛知高校(名古屋))を含む全国12校が出場を決めた第4回全国高校総合文化祭(うち総文、7月31日~10月31日)が、審査のないうちでオンライン開催が実現された。両校とも感染を被曝する機会がなく、10日にようやく総文・オンライン上演向けの撮影を兼ねる公演を、校舎内で開催できた。そして31日、津島北高では全校生徒に舞台を披露し、「千秋楽」となる。

津島北高

31日、津島北高校演劇部は始業式で全校生徒に舞台を披露し、総文へ取り組んできた舞台の最後となる。

昨年12月の中部日本ブロック大会で初の全国切符をつかんだ。当時の3年生は春に卒業。総文は入れ替りに近い配役委員で臨む予定だった。しかし、新型コロナウイルス感染症防止のため6月まで部活動は休止。8月10日の名古屋市東文化小劇場での総文向けの撮影を兼ねた上演が、観客を前にした最初の舞台となった。

演目は「ジンコちゃんの世界」。ミジンのジンコと、それを観察する高校生のサチコの間で描かれる生命の物語だ。部長の山中優希さん(2年)は、メインキャストの卒業で、昨年度の微生物役



「ジンコちゃんの世界」を演じる津島北高校演劇部=10日午後、名古屋市東区の東文化小劇場

からサチコ役になった。総文に向け、箱古を継ぎなればいけない時期に部活動は休止。新入生5人を迎えての始動も遅れた。さらに、総文の高知県での開催もなくなった。審査がないオンライン上演に変更。「聞いた瞬間みんなで泣きました。生だからその迫力を見てもらいたかった」と山中さんは話す。そこから気持ちを切り替え、10日の舞台に向けて動き出した。ジンコたち微生物の世界を描く場面は踊りや歌が大切だ。本番直前で苦労しながら仕上げた。舞台を終え、山中さんは「先輩のコピーではなかったと、自分たちだけの舞台を目指した。全力でやりきれました。オンライン上演についても「多くの人に届けられる。普段演劇を見ない人も見てほしい」と前向きにとらえる。



「井戸の茶碗」を上演する愛知高校演劇部=10日午後、名古屋市東区の東文化小劇場

愛知高

愛知高校演劇部が全国大会出場を勝ち取った演目は、古典落語「井戸の茶碗」を脚色した舞台だ。正長者のくすの木の清兵衛が、長屋に住む浪人・千代田ト喜と落敷に住む細川家家臣の若侍の間で右往左往する

縁をコミカルに表現する。古典落語を題材にした演目が得意な愛知高校は、2011年以降の総文出場だった。通常は2年生で「引退」するのが演劇部の流れだ。ただ、9年ぶりの全国大会に向け、今回は3年生6人が部活動を継続して8月10日の舞台に臨んだ。

(R2.8.31 朝日新聞夕刊)